

山里の住民みんなで取り組んだ地域の活性化

京都府南丹市 天引区の活性化と未来を考える会







朝靄の残る丹波のゆるやかな山々に囲まれた、京都府南丹市みなみたんの天引集落を訪れる。古代山陰道が通った時代から街道沿いの要衝にあり、戦国時代には明智光秀の丹波攻めの激戦地にもなったという天引は、石積みの水路や炭窯などが残り、オオサンショウウオも生息する清流など、歴史と自然が織りなす美しい山村風景が残る。この天引集落の全住民参加で作る「天引区の活性化と未来を考える会」（会長…小畠喜久男さん）の一日を取材した。

この日は、集落の中心にある天引八幡神社の広場において、2015年から毎月2回第2・第4日曜日開催される「むくむく市」の開催日。朝9時半に開店し、東屋には地元の新鮮野菜・お米・加工品などが並び、有志が自主的に運営する屋台も並ぶ。テーブルとイスも備えられ、買い物済ませた後に交流を楽しむことができる。むくむく市の販売担当の奥村幸平さんは「村のおばあちゃんたちが、自分の作った野菜が売れることを知って生きがいになった」と語る。

出店の一角には、ドラム缶の窯を使ってピザを焼く天引の女性たちのグループ。かつてのママ友同士が作るピザは、季節の新鮮野菜を載せて生地から発酵した人気商品だ。「売り上げで、みんなで温泉やカニを食べに行くのを楽しみに、やる気につながっている」とお店から笑いが絶えない。隣では、天引に移住して5年目の奥村さつきさんによる地元産ジビエの鹿シチューや、天引の親父さんたちが腕を奮う焼き物の匂いも立ち込める。また、自宅で育てたメダカの販売や、竹筒を使った流しそうめんにも子どもたちは目を輝かせる。

大きな樟の木の下に設けられたステージでは、飛び入り参加もできる「オープンマイク」も開催。本格的な音響機材が備えられプロの歌手も参加する。京都市右京区で幼稚園を営む升光泰雄さんの一家は、3世代でステージに立ち歌やダンスを披露する。升光さんの幼稚園では天引の畑で農業体験も行っている。



「天引に来ると人の温かい息遣いを毎回感じている。この野菜を食べると子どもたちの食欲がまるで違う」と、天引との関係づくりは、自身にとっても幼稚園にとっても欠かせない存在のようだ。

午後、天引八幡神社の境内の木陰に座り、同会の事務局長を長年務めてきた原田久さんにお話を伺った。

10数年前の天引は、人口減少と空き家の増加が進み、山林や田畑の荒れが目立ち始め、集落は閉塞感に包まれていた。転機となったのは2012年4月、当時の区長、奥村将治さんが「どうしたら集落が元気になるのか」を考え、半年の協議の後、区長の諮問機関「天引区の活性化と未来を考える委員会」（「委員会」を作ったことにはじまる。天引区の運営は長らく、区長が議案を作り役員会が承認するという形をとり、区長の負担が大きかった。原田さんは「地域の課題解決を区長任せにせず、諮問機関を作りそこに事務局を設置したことで、企画案がたくさん出てくるようになった。事務局に女性も入り、地域の意思決定の場を女性が担うことになった意義も大きい」と振り返る。

「委員会」はその後諮問機関から実行組織「天引区の活性化と未来を考える会」に発展する。各種団体の代表で構成する運営委員会は毎月の定例開催とした。会議のルールを「自由に発言する」「人の発言をけなさない」「前例にとらわれない」「すぐ実現できなくても夢を語る」と決め、女性や若者も安心して意見を出して活発に話し合う環境を整備したことが、その後の活動の大きな原動力になっていた。

まずは、天引の将来像について住民からの意見をまとめた「天引活性化マップ」の作成、続いて天引の地域資源をまとめたマップや写真集も作成。集落内外の交流を深めるイベントとして、初夏の「はたるコンサート」や、夏の納涼祭と松明上げの復活、秋の運動会や新年のどんど焼きなど、初めての試みを実現さ



せ、住民に自信をもたらしていた。

また、高齢者の生活をサポートする「便利屋さん」「お買い物デイ」の取り組み、空き家対策・移住者促進会議など、対策が必要とされる地域課題に次々と取り組んできた。

情報公開にもこだわり、会報「あまびき元氣ニュース」を原則毎月発行しこれまで121号を数える。現在の事務局長で、会報発行を手掛けてきた清水郁代さんは「おばあちゃんたちから『よくわかるで、次は自分も行くわな』と声をかけてくれるのがうれしい」と話す。同会の活動情報は住民みんなで共有し、村の雰囲気づくりに大きく貢献している。

こうして、かつての封建的な村から見違えるほどの元氣な集落となった天引だが「地域の記憶が失われつつある」ことに危機感を持っている。例えば、かつては林業が盛んだった天引では、炭焼きが主要な産業で、効率的な生産のため山中に炭窯を造成していたが近年炭焼きをする人はいなくなっていた。こうした炭窯を復活させ、実際に移住者も巻き込み炭焼き仕事の継承を図っている。こうした、地域の産業や生活の知恵、習わし、歴史などを調査し記録にまとめ、昨年「天引に生きる」という冊子として完成させたところだ。

夕方からは、納涼祭と松明上げの行事も行われた。軽トラックを並べた荷台をステージに住民たちが熱唱し、飛び入りの紙芝居上演もあるなか、周囲の山から夕風がそよいでくる。

日暮れとともに、薬師堂の参道に並べた松明に点火。消防団の壮年層が協力して灯す炎が集落を幻想的に照らし出し、夏の終わりを告げる。

丹波の山里に灯された天引の挑戦、古から未来へと続く道を照らしていく。

【連絡先】 天引区の活性化と未来を考える会
メール：amabiki.kasseika@gmail.com
URL：https://amabiki-kasseika.moo.jp/